### **アミア・ブレトネメル（Amia Bretonemer）**

**概要**

アミア・ブレトネメルは、クリオス自由都市連合の都市スラム出身であり、かつてヤファル・インダストリーによって兵器計画に巻き込まれた“元被験体”である。特異な神経干渉能力を持ち、戦術兵器《ファウスト》および随伴機《シュラウド》の操縦者として知られていたが、グリデーオスの介入によってその存在が明らかとなった後、彼女は「保護対象」としてチームの支援下に置かれることとなる。

現在、彼女は戦闘任務からは完全に離れ、ファウストおよびシュラウドの運用は封印。後方支援要員として、ドローン偵察・電子機器の整備・管制ネットワークの運用などに従事しており、その技術的適性を新たな形で発揮している。

また、加入後はフェヴォスティンの自邸に一時的に居住しており、生活の安定と教育支援の一環として、簡単な読み書きや数的概念の学習も開始されている。かつて「記号」としてのみ存在を認識されていた彼女にとって、「言葉」と「名」を持つことは、緩やかな再生の第一歩でもある。

ただし、アミア自身はこの“保護”措置を感情的な救済とは捉えていない。グリデーオスへの加入もまた、「仲間」になることではなく、「協力者」としての役割を果たすためのものと明確に位置づけている。信頼や情緒的な結びつきに対しては依然として強い警戒心を抱いており、あくまで**相互利益に基づいた限定的な関係性**としてチームとの距離を測っている。

彼女の目に映るのは、戦場ではなくシステム。仲間ではなく任務。その冷徹とも言える視点の裏には、かつて“人に裏切られ続けた少女”としての痛みが、今も静かに横たわっている。

**性格**

アミアは、極度に内向的で他者への警戒心が非常に強い少女である。その根底には、スラムでの過酷な幼少期と、兵器として生きることを強いられた収容生活の記憶が深く刻まれており、善意や共感といった人間的な感情に対して、むしろ拒否や疑念を強く示す傾向がある。

感情を表に出すことはほとんどなく、常に冷静で理知的な言動を心がけているように見えるが、これは本質的な性格というよりも、生き延びるために身につけた防衛的なスタイルである。彼女にとって「感情の開示」は、痛みや裏切りの原因となるものであり、それを許すことはすなわち、自分の“生存戦略”を否定することに等しい。

合理主義的で功利的な思考を好み、自他の行動を「意味」「効率」「生存価値」といった基準で捉えることが多い。「正義」「善悪」「救済」といった抽象的な理念には懐疑的で、それらを口にする者を信用しない。とりわけ「かわいそう」「助けてあげたい」といった言葉には激しく反発する。なぜならそれらは、彼女が過去に命懸けで掴み取ってきた“尊厳”を、無自覚に否定しかねないからである。

一方で、人と関わりたいという欲求がまったくないわけではない。むしろ、誰かの言葉に救われたい、名前を呼ばれたい、という渇望は確かに存在している。だがそれを自覚することすら彼女には「怖いこと」であり、そのため他者との距離感は常に慎重に保たれている。

加えて、深層では“素直さ”を秘めており、本当は嬉しいことに対しても皮肉や無関心で取り繕ってしまう癖がある。チトガやフェヴォスティンのように過干渉せず、感情を押しつけない人物に対しては、内心でほのかな安心感を覚えることもある。

現在、グリデーオスという環境に身を置く中で、彼女は少しずつ変わりつつある。だが、それは「仲間を信じたから」ではなく、まずは「信じずに済む距離で協力関係を築ける」からこそ可能になった微かな変化である。彼女にとって、誰かと共にいるとは、まず「干渉されないこと」、そして「記号ではなく名前で扱われること」である。

### **能力**

**潜在能力**

### **空間認識能力の異常な発達**

アミアは、空間把握に関して非常に高い直感的能力を有しており、自身を中心とした周囲の構造や物体の配置、動線、障害物の位置などを視覚に頼らずに把握することができる。この空間認識能力は、視界の制限された環境や複雑な立体構造の中でも精度を失わず、移動経路や安全領域を即座に判断する力となっている。幼少期を過ごしたスラム街での生存経験を通じて自然に形成されたもので、危険の兆候を環境全体から感知する能力としても機能している。

### **生存本能と直感的判断力**

アミアは、極限環境における生活経験に基づいた強い生存本能を持ち、状況判断においては理論や訓練よりも直感を優先する傾向がある。危機の察知や回避、対象との距離感、攻撃の可否といった判断を即座に下すことができ、反射的な行動による回避や対応を得意とする。この能力は、戦術的計算に基づく行動ではなく、感覚に基づいた即応によって成立しており、特に不意の接近や環境の変化に対する反応速度の高さに顕著に表れている。

### **忍耐・耐久への高適性**

アミアは、幼少期からの過酷な生活環境により、極めて高い身体的および精神的耐性を備えている。長期間にわたる飢餓や不衛生な環境への適応によって感染症への抵抗力が高く、肉体的苦痛や極度のストレスにも耐えることが可能である。また、精神的にも過剰な緊張や恐怖によって判断力を失うことが少なく、極限状態においても冷静さを保ち続ける傾向がある。これらの特性は、兵器の操縦時や戦闘下における長時間の活動にも反映されており、高い持続性と安定性を発揮する。

### **感覚の発達**

アミアは下半身不随の影響により、上半身の感覚、特に聴覚と触覚が代償的に発達している。外的刺激に対する反応精度が極めて高く、足音や空気の振動といった微細な変化を即座に察知する能力を持つ。移動手段が限られる中で迅速な逃走が困難であることから、わずかな環境の異変を感覚的に捉えて先手を打つ必要性があり、これが五感の鋭敏化を促す要因となっている。特に肌を通じた圧力や接触への反応は高く、空間や接近対象の存在を視覚に頼らず把握する能力へと繋がっている。

**特殊能力**

アミア・ブレトネメルは、生体神経を介して機械と“接続”し、外部インターフェースを用いずに直接的な操作を可能とする**非接触型神経リンク能力**を持つ。

この能力の本質は、**思考信号による機械系統への神経的アクセス**にある。彼女は自身の神経活動を「出力信号」として変換し、それを周囲の機器に“流し込む”ことで、まるで手足を動かすように機械を操ることができる。操作はコマンド入力のような段階的な命令ではなく、あくまで“感覚”に基づく動作であり、**機械を自分の身体の延長として扱える**点が最大の特徴である。

対象となるのは、**自律稼働中で操縦者の存在しない電子機器や機械ユニット**に限られ、人間による明示的な操作や指示系統が存在する機器への干渉はできない。ただし、一度リンクした機体に対しては、複数の感覚（視覚・聴覚・触覚など）を統合的にフィードバックとして受け取り、**“自身の五感”として認識・処理する**ことが可能である。

過去においては、ヤファル・インダストリー製の重装兵器《ファウスト》や戦術随伴機《シュラウド》の操作においてこの能力を最大限に発揮しており、複数機体を同時に制御しながら、陣形や戦術をリアルタイムで編成・適応させるという高度な戦闘指揮も実行していた。

現在、これらの兵装は封印されているが、**グリデーオスの後方支援任務においてはドローン偵察・整備ユニットの遠隔制御などに応用されており、その精度と反応速度は依然として健在**である。

アミアにとって、この能力は“生きるための武器”であると同時に、\*\*“唯一、自分の存在が拒絶されない領域”\*\*である。人間と距離を置き続ける彼女にとって、機械との接続は単なる道具の使用ではなく、**無言の信頼関係**に近い形で成立している。

**人間に対する考え方と感情**

アミア・ブレトネメルにとって「人間」とは、本質的に**信用の対象ではなく、警戒すべき存在**である。スラムでの幼少期、そして兵器実験体として過ごした収容環境の中で、彼女は繰り返し人間によって見捨てられ、傷つけられてきた。親切や善意は長く続かず、施しは必ず代償を伴った。そうした記憶が彼女に、「人は常に裏切る」という前提を深く刻み込んでいる。

グリデーオスに保護された直後のアミアは、この新しい環境を\*\*「安全」ではなく「未知の実験室」**として見ている。チームの誰一人として彼女に危害を加えるわけではないが、その親切や関心にはどこか条件があるはずだと疑っており、**“仲間”という言葉には強い違和感すら抱いている\*\*。

特に、過去に受けた「かわいそう」「助けてあげたい」といった同情的視線や言葉に対しては、激しい拒絶反応を見せる。アミアにとって、それらは過去を否定される暴力であり、自らの生存と誇りを「憐れみ」に置き換えようとする“侮辱”に等しい。\*\*「私は、助けられた存在じゃない。生き延びた存在なんだ」\*\*という確固たる意識が、彼女の心の芯にある。

その一方で、アミアの内面には確かに\*\*「信じたい」「わかってほしい」という感情が眠っている\*\*。ただしそれは、本人にとっては最も触れてはならない“弱さ”であり、表に出せば裏切られると信じ込んでいるため、徹底して否認・抑圧されている。

現時点で、彼女が比較的落ち着いて関われるのは、**感情を押しつけず、過干渉を避ける人物**だけである。たとえば、フェヴォスティンのように「見守るが踏み込まない」態度には微かな安心を感じ、チトガのように感情を“記号”で処理する存在には奇妙な親近感を覚えている。

彼女の人間観は、「信じてはいけない」から「信じられない」へ、そしてようやく「信じてみたいかもしれない」へと、ようやく始点に立ったばかりである。だがその道のりは、彼女にとって**戦場よりも困難な“日常”との戦い**である。

**正義と悪に対する価値観**

アミア・ブレトネメルにとって、「正義」や「悪」といった言葉は、**現実に即した判断基準ではなく、“勝者が都合よく後から貼り付けるラベル”に過ぎない**。彼女の価値観は、善悪の二元論ではなく、「生き延びられるか否か」「その選択が意味を持つか否か」という**極めて即物的・実利的な軸**で形成されている。

スラムでの幼少期、暴力と搾取に晒されながらも誰からも救われることはなかった。「正義」を名乗る者が自分を助けに来たことは一度もなく、「悪」とされる存在のほうが、生きるための手段や取引を提示してくれたことさえあった。その経験は、アミアにとって「正義」とは**力を持つ者が振りかざす道具**であり、弱者には適用されない幻想だという深い冷笑を生み出している。

グリデーオスの一部メンバーが掲げる「守るべきもののために戦う」「善き意志の連帯」といった理念に対しても、アミアは**どこか一歩引いた目線でそれを見ている**。彼女にとって正義の主張とは、「今の環境に守られている者」が口にする余裕であり、それは自分には許されない特権だという認識がある。

ただし、彼女は「正義」を否定しているわけではない。むしろ、「もしそれが誰かにとって意味を持つなら、それは存在してもいい」と思っている節がある。だが、自分がそれを信じるには、あまりにも長く、あまりにも深く裏切られてきた。**だから彼女は、“正義を語らないことで自分を守っている”**。

「正義とは？」と問われたとき、彼女はこう答えるかもしれない。

**「それって、誰かが“悪くない自分”になるための言い訳じゃないの？」**

彼女にとって、「正義」とは今なお遠く、信じるには脆く、しかしどこかで羨望を感じる“他人のもの”である。

**彼女は正義か悪か**

アミア・ブレトネメルは、物語の中で「正義」でも「悪」でもない、“**そのどちらにも回収されない存在**”として描かれている。彼女は、明確な信念や理想を掲げて行動するわけではなく、誰かを救うために戦っていたわけでもない。反対に、誰かを傷つけたいと望んでいたわけでもない。ただ、「**生きるためにそうせざるを得なかった**」というだけだ。

かつて彼女は、自らの意思とは関係なく、重装兵器《ファウスト》の操縦者として戦場に送り込まれ、多くの機械と命を制御していた。だがその行動に「悪意」はなかった。それどころか、“**それしか居場所がなかった**”彼女にとって、戦うことは唯一「存在を許される手段」でしかなかった​。

この点において、アミアは“**悪の側に立たされた者**”ではあっても、“**悪を選んだ者**”ではない。また、後にグリデーオスに保護されることになっても、彼女は**自らを「正義の味方」として見ていない**。仲間として迎えられても、その関係はあくまで「**協力者**」としての割り切りであり、「**正義の側にいる**」という自負を持つことはない。つまりアミアは、物語上において“**正義か悪か**”**という二項対立を相対化する存在**である。彼女の存在は、他のキャラクターたちが持つ理想──「守るために戦う」「正義の名の下に行動する」といった価値観に対して、静かだが鋭い問いを突きつける。

「**あなたたちは、救われる側に生まれたから、“正義”って言えるんだよね？**」

彼女は、物語の中で正義に「加わる」のではなく、**その周縁に立ち続けることで、正義という構造の“内側と外側”を照らし出す鏡**のような役割を担っている。

それゆえに、アミア・ブレトネメルは“悪”と戦うキャラクターではなく、“正義そのものを問う存在”であり、その存在そのものが物語に**奥行きと倫理の揺らぎ**をもたらしている。

### **言動・行動の癖**

アミア・ブレトネメルの言動は、一貫して**極端に抑制された感情表現**と、**防衛的な無関心の装い**に貫かれている。彼女は、周囲の人間との関係においてまず「距離を取る」ことを選び、その会話や動作にもそれが色濃く表れている。

#### **◉ 言葉づかいと話し方**

彼女の言葉は**端的かつぶっきらぼう**で、敬語や婉曲表現を使うことはほとんどない。短文・断定的な語尾・必要最低限の情報伝達が基本であり、口数も少ない。これは単に教養の不足というだけでなく、**言葉の感情的な重みを嫌う**傾向の表れであり、「話せば何かを与えてしまう」と無意識に警戒しているためである。

たとえば、「ありがとう」と言うべき場面では黙って去る、「大丈夫？」という問いには「別に」とだけ返す。嬉しさや感謝を言葉にすることには**強い心理的抵抗**があるが、それが表情や動作に滲んでしまうこともあり、本人にとってはその“漏れ”すらストレスになっている。

#### **◉ 感情の反応**

彼女は**好意や同情に対して過敏に反応する**癖がある。特に「かわいそう」「頑張ったね」といった言葉に対しては、反射的に顔をそむける・黙り込む・舌打ちするなど、過剰とも言える拒否反応を示す傾向がある。これは、過去の「施し」に裏切られてきた経験が条件反射として身体に染みついているためである。

一方で、相手が無言で手助けをしたり、感情を交えず淡々と接してくる場合は、明確な拒絶は見せない。**“感情を押しつけられない関わり”に対してだけは、かすかな安堵のような反応を返すこともある**。

#### **◉ 行動様式**

行動においても、アミアは\*\*「準備をしてから動く」\*\*という癖を徹底しており、不意打ちやサプライズを非常に嫌う。足音や空気の動きなど、環境変化に敏感に反応する傾向があり、背後から声をかけられると即座に振り返る、手にしていた物を落とすといった反射行動が見られることもある​アミア・ブレトネメル（Amia Bretone…。

また、居場所の確保に強いこだわりを見せ、**自分の空間に物が置かれる・他人が踏み入ることに対して極めて神経質**。整備室などでの持ち場では、工具の配置を厳密に保っており、勝手に動かされると無言で元に戻す。これらの行動は、“生き残るための習慣”として身についた、**支配可能な環境を保つための防衛本能**でもある。

#### **◉ 視線と接触の扱い**

人との目線の交差を避ける傾向が強く、会話中はしばしば視線を逸らすか、機械や手元の作業に意識を逃がしている。物理的な接触に対しても敏感で、意図せず触れられた場合には軽い拒絶反応を示す（手を振り払う、身を引くなど）。ただし、自分から近づくときは慎重に距離を測った上で、ほとんど音も気配もなく動く癖があり、\*\*“気づいたら近くにいる”\*\*という現象がよく起きる。

#### **◉ 全体の口調：無駄を省いた「低温」な話し方**

アミアの口調は、**淡々として抑揚が少なく、理知的な冷静さが常に先に立つ**。話し方は直線的で飾り気がなく、「どうでもいい情報は言わない」「余計な感情表現は削ぐ」という姿勢が一貫している。語尾に感嘆や情緒的表現が乗ることは極めて稀であり、会話は必要最小限、かつ冷徹に切り分ける傾向がある。

#### **◉ 言葉選びの傾向**

1. **理知的・合理的な分析語彙を好む** 　→ 「意味がない」「効率が悪い」「それで何になるの」など、**行動や発言の実利性を即座に判定するような言葉**が多く用いられる。  
    　→ 感情論や抽象的表現に対しては、「感情で判断したの？」「そういうの、意味あると思ってるの？」など、冷笑気味の切り返しが見られる。
2. **皮肉と冷笑を帯びた表現が多い** 　→ 他人の“善意”や“お節介”に対しては、「ありがたいお言葉、ね」「それで、気が済んだ？」といった**鋭く刺すような皮肉表現**を使う。  
    　→ 相手の理想や信念に触れると、「綺麗な話。誰かの教科書にでも書いてあった？」など、**理屈と現実の乖離をあえて嘲るようなフレーズ**を口にする。
3. **自己表現においても自嘲的な語句を選ぶ傾向あり** 　→ 自身を語る際、「捨てられた部品」「壊れた端末みたいなもん」といった、**機械的・モノ的な喩えを使う**傾向がある。  
    　→ 感情を向けられると、「そういうの、私には過剰。壊れやすいから」と言い放つことも。

#### **◉ 語尾の特徴**

* 基本は**断定調**：  
   　語尾は「〜だ」「〜じゃないか」「〜だけど」「〜でしょ」「〜なの？」など、**語尾を上げない・引かない、平板な断定口調**が多い。曖昧に言葉を濁すことは少なく、**常に論理的な終わり方**を好む。
* 疲れたような、投げやり気味の「……ね」「……だけど」：  
   　ときおり、諦念を含んだような語尾で会話を打ち切る傾向があり、「そういうの、もういい……けど」「言っても無駄だろうけどね」といった形で、**語尾に一段下がる音感と距離感**が生まれる。
* 感情の高まりには「皮肉＋平坦」：  
   　怒りや苛立ちを表すときでも、叫ぶような口調ではなく、むしろ**冷たく平坦な語尾に怒気を含ませる**。  
   　例：「“ありがとう”？ はいはい、立派な言葉だよね」「で？ それが私に何をくれるっての？」

### **サンプル台詞集**

* 「“かわいそう”って顔、やめて。こっちは壊れてない、無駄に触らないで」
* 「正義？　そっちの都合でしょ、それ」
* 「優しいね、君。“誰にも噛みつかれない距離”から見てる人って」
* 「私は味方じゃない。“使えるから置かれてる”だけ。合ってるでしょ？」